

革心

法学部 2 年 野村宇宙

起

皆さん、想像してください。ある男の子がいじめを目撃しました。いじめられていたのは話したことの無い同級生。いじめっ子が彼を数人で囲み、何度も殴っていたのです。男の子は迷いました。彼を助けるべきか。それとも、巻き添えを食らうリスクを負ってまで助ける必要などないのか。

あなたが男の子ならどうしますか？「自分なら見捨ててしまう…」と答えたあなた。私もかつて同じように見捨ててしまいました。「自分なら助けるよ」と答えたあなた。実際に弁論部でいじめが起きたら、本当に同じことが言えますか？

きっと、「自分なら助けるよ」と答え、実際に行動できる人は稀です。誰だって自分が可愛いし、傷つくのは怖い。まして、自分が止めに入っても状況がよくなるとは限らない。人のために勇気ある行動を起こすのは難しいのです。

では、こんな場面を想像してください。一台の戦車がキュルキュルと不気味な声をあげ、手足を縛られた男性に近づいていきます。戦車はゆっくりとゆっくりと近づき、そして、静かに男性を轢き殺したのです。遠ざかる戦車の足元に残されたのは、オレンジ色の服とバラバラの肉片、そして真っ赤な血溜まりとぐちゃぐちゃの脳味噌のみ。これは今も紛争が続くシリアで、IS に男性が処刑された動画の内容です。

これを聞いてどう感じましたか？感想は人それぞれだと思いますが、共通しているのは結局これが私たちにとって遠い海の向こうの出来事だということです。いくら想像すれど、平和な日本の私たちにはリアリティがないんです。そして、仮に強く心を動かされても自分には何もできない。よって、紛争に対しては何も行動を起こせないのが当然です。

いじめと紛争。この 2 つはかけ離れた話に聞こえますが、根っこは繋がっています。どちらも、人のために行動を起こすのは難しいという現実を容赦なく突きつけてきます。勇気を出していじめを止めるのは難しい。そして、紛争という遠い大問題に関心を持ち、自分なりの行動を起こすのは難しい。人は結局自分のことで精一杯。人の事情まで背負う余裕なんてないのが普通です。

では、自分には何もできないよと諦めてよいのでしょうか？いや、みんながみんなそう開き直った社会は成り立ちません。みんなが社会を支えるしかありません。「世界は誰かの仕事で出来ている」という言葉があります。今この瞬間も誰かがどこかで働き、汗を流している。そんな私たち一人一人の働きがあつてこそ、世界という想像もできないほど大きな存在は動いています。一人、また一人

と手を抜くと、世界は土台を失った建物のように崩れてしまいます。逆に言えば、一人一人が誰かのためにと行動を起こせば、世界は一步ずつ良い方向に変わるはず。一方で、そうやって人のために行動を起こすのが難しいのも事実。そこで、「人のために行動を起こせるようになるには何が必要か」。これについてあと 30 分弱。一緒に考えてみましょう。

承

改めて問います。人のために行動を起こすことはなぜ難しいのでしょうか？それはきっと、人の心に葛藤が生じるからです。

「自分さえよければいいとする弱い自分」と「人を思いやれる強い自分」。この 2 人が心の中で勝ったり負けたりしているのが人間です。2 人が常に戦うからこそ葛藤が生まれます。いじめの話では、「自分までいじめられるのはご免だし、助けなくていいやとする自分」と「可哀想だから助けたいと思う自分」。この 2 人が戦っていました。紛争もそうです。「自分は安全地帯だからいいやとする自分」と「苦しむ彼らのために何でもしたいと思う自分」。この 2 人が葛藤を生んでいます。

では、どうすれば葛藤を乗り越えられるのでしょうか？いや、そもそも乗り越える必要なんてあるのでしょうか？ここにいる皆さんも、弁論部がブラックなことを除けばそれなりに今幸せなはず。それで満足しておいた方が明らかに楽です。ですが、それでは社会が成り立たないのは先程述べた通りです。自分だけでなく人の幸せも考えて行動するしかありません。よって、「自分さえよければいいや」と開き直すより、葛藤を乗り越えるにはどうしたらいいか頭を捻る方が百倍建設的です。今度はそれについて考えてみましょう。

転

いじめられている同級生を見殺しにした男の子と、紛争に無関心な私たち。

いじめを見た男の子は「可哀想で見てられない…。何とか助けてやりたい！」と心から思えたのでしょうか？話したことない同級生にそこまで強く共感できる人は稀です。むしろ、「誰かが何とかするだろう。自分が被害者じゃなくてよかった」と。そう囁く弱い自分が出てきたはず。紛争もそうです。紛争の被害者と私たちは遠く離れた赤の他人。「可哀想だな、介入や支援がもっと進めばいいのに…」と。それ自体は会場のほとんどの人が思ったはず。しかし、今日帰った後に「紛争に苦しむ彼らを何としても助けたい！」と決意する人はいないでしょう。それどころか、数時間後のレセプションではお酒のことで頭が一杯のはず。苦しむ人を見て口では「可哀想だ」と言っても、結局その苦しみは人の物。安全地帯の自分には単なる他人事なんです。

そして、この「苦しむ人に優しいつもり」こそ一番危うい。ただ想像して可哀想だなど言うだけで自己満足してしまうからです。「自分って何て心優しい人間なんだろう！」と満足した人は具体的な行動を何もとりません。

そんなの本当の想像ではありません。では、本当の想像とは何か。「この苦しみを何とかしたい！」と。心から思えるのは大事な人が苦しんでいる時ではないですか？相手が赤の他人だから結局他人事なんです。その違いはどこにあるのでしょうか？それは愛です。愛しているからこそ、大事な人が苦しんでいたら本気で何とかしようと勇気を奮い起こせます。その時こそ、人は自分さえよければいいとする弱い自分に克てるのです。結局みんな、周りの人に興味があるようでないんです。人間として愛していないのです。いきなり赤の他人を愛するのは難しいですが、まずは近くの人とレセプションで話してみてください。案外いいやつだと思わずです。そうやって人との関わりを軸に少しずつ愛の裾野を広げればいいんです。

しかし、それでも人のため行動を起こすには最後の壁があります。皆さん、いじめの現場や紛争のニュースを見たとき、「可哀想だけど自分には何もできない」と思っていますか？そう、最後の壁とは自分なんて何もできないと諦める弱い自分です。確かに、そうした問題を自分が解決できるとは中々思えません。しかし、自分に何もできないと思うならなぜ弁論部にいるのでしょうか？社会問題の被害者に心を痛み、問題の現状や原因を分析する。そして、あれこれ解決策を模索して社会に訴える。あなたは少しずつでも社会を確かに変えている。だからもっと自信を持ちましょう。自分の可能性を信じてあげましょう。

かつてガンディーは、一人の人間の可能性をどこまでも信じました。彼は偉大な魂と呼ばれましたが、実は信徒と添い寝してスキャンダルになったこともありました。彼もまた、私と変わらない女好きな普通の男だったんです。それでも彼はイギリスによる植民地支配の逆風が吹き荒れる中、一人立ちました。イギリスによる塩の専売に歯向かい、400 kmも離れた海岸へ塩を拾いに向かう「塩の行進」を始めたのです。黙々と力強く歩みを進める彼の姿を見て、一人、また一人と仲間が増えました。そして、気づけば1000人もの大行列ができていたのです。この塩の行進はインド市民革命の火蓋を切りました。この偉大な社会変革は、確かにガンディーという一人の人間が始めたのです。

ガンディーと違い、同級生を見捨てた男の子は自分にいじめを何とかできると到底思えなかったでしょう。会場のほとんどの人は、自分に紛争で苦しむ人を救えるとは思っていないはずです。自分なんて何もできないと諦めてしまう弱い自分に負けているんです。だからこそ、自分でも人の役に立てると、社会を少しは変えられると信じる必要があります。

結

人の苦しみを必死に想像する、そして自分の可能性を信じる。そうやって、弱い自分を乗り越えていく。社会を変えるのに必要なのは、実は自分自身を変えることなのです。

この弁論を聞いて、人をもっと愛せだとか、自分の可能性を信じろだとか、そうすれば社会は変わるだとか…単なる綺麗事だと思われたかもしれません。そんなの道德の授業で習ったよと。では聞きます。あなたは道德で教わった綺麗事を実現するのに、どれだけ努力をしましたか？何度も何度も努力して、それでも諦めずに努力し抜いた人が言うなら分かります。ただ、大抵の人は端から諦めたり、途中で簡単に投げ出してはいませんか？私の弁論は、まさにそんな人のための弁論です。

私はそんな人たちに、自分さえよければいいとする矮小な自分と、自分なんて何もできないとする弱い自分と戦い続けて欲しいのです。そうやって自らの心を変革する「革心」を絶えず行ってこそ、人のために行動できる強い自分です。社会変革という大仕事は、実はそうした地道な革心が積み重なって初めて進みます。私がこの弁論で訴えたかったのはただ一つ。己の革心をもって、断じて社会変革を成し遂げよ！

ご清聴ありがとうございました。